

緑のセンターだより



No.152

公益財団法人 旭川市公園緑地協会 旭川市緑のセンター（相談所）
〒078-8327 旭川市神楽岡公園内 Tel：0166-65-5553 Fax：0166-65-5626
旭川市公園緑地協会ホームページ <http://www.asahikawa-park.or.jp>

発行：平成 27 年 2 月 1 日

講習会のご案内（お申込み・受付は前月の 20 日から）

「果樹の剪定と栽培管理」 -リンゴ、サクランボ、プラム-

とき 平成 27 年 2 月 22 日（日）
午後 1：30～3：30 定員 50 名

講師 ふじくらすも果樹園
代表 増茂 聡さん



《連続講座のお知らせ》3 月 22 日
第 6 回目「植物を種から育てよう」
～春作業・種まきの方法～教材費 500 円



※閉講式もあります



今年こそ、色々
チャレンジするぞ～



花に野菜に…盆栽も

「家庭菜園の野菜作り…」
コンテナで育てるミニ野菜 など

次年度の講習会予定（詳細は次号に記載）



楽しみ

「こどもの講座」
葉・木の実で動物を…



何かやってみよう

「おしゃれな鉢植え…」
木の実などでオブジェ作り…



新講座！「冬の公園探索会」

3 月 15 日（日）09：00～12：00

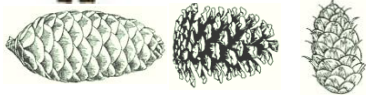
定員 10 名 小学生～（小学性は保護者要）

・スノーシューで神楽岡公園を歩き、冬芽
の観察で樹木を知り、自然を楽しむ

講師：北邦野草園研究員



受付：3 月 3 日（火）9 時から
※暖かい服装で参加してね！



展示会のご案内（初日は午後から、最終日 4 時まで）

「神楽岡公園の四季写真展」

2 月 1 日～3 月 29 日

【休館日のご案内】

4 月～10 月は第 2・第 4 月曜日が休館日です。（祝日の場合は翌日）

11 月～ 3 月は毎週月曜日が休館日です。（ " ）

無料歩くスキーツーの貸出は
3 月 1 日（日）迄です



神楽岡公園内

～ 花のつくり ～

今回から「花のしくみと役割」について説明します。花は種子植物の生殖器官で、子孫を残すため葉と茎が進化して出来たといわれています。今回は被子植物の「花のつくり」を簡単に説明します。

■花被：花冠と萼の全体をいい、花弁と萼片を合わせて花被片と呼びます。

- ・花冠（花弁）…萼より内側の花葉を一括して花冠と呼び、それをつくる一つひとつを花弁といいます。
- ・萼…花の最も外側にある花葉の集まりをいい、それをつくる一枚一枚を萼片と呼びます。

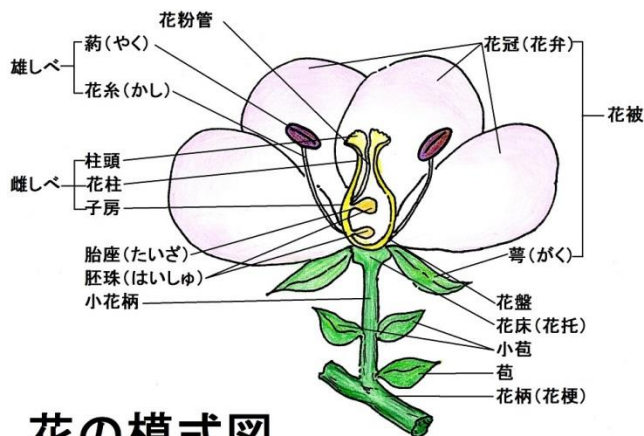
■雄しべ：雄ずいとも呼び、花粉をつくる器官で葯と花糸を一括して呼びます。雄しべの全体を雄しべ群（雄ずい群）と呼びます。

- ・葯…花粉をつくり、収納する部分です。
- ・花糸…葯を支える役割を担う部分です。

■雌しべ：雌ずいとも呼び、受粉し果実・種子をつくる器官で柱頭と花柱、子房で構成します。

- ・柱頭…受粉を行う部分で、粘液や突起で花粉が付き易い構造です。
- ・花柱…柱頭と子房をつなぐ役割で、花粉管の通路でもあります。
- ・子房…胚珠を容れる部分で受粉後は果実になります。
- ・花粉管・胎座・胚珠…花粉管は柱頭から胚珠まで花粉を運ぶ通路、胎座は胚珠が子房に着生する部分、胚珠は胚をつくり成熟して種子となる部分です。

（参考資料：八坂書房「図説植物用語事典」、小学館「園芸植物大事典」ほか）



花の模式図

緑の相談 QアンドA (26)

大花のハナキリンを数年前に購入しました。葉は大きく育つのですが花が全然咲きません。どう管理したら咲くでしょうか？ また、伸び過ぎたら切って挿し木したいと考えていますが、可能でしょうか？



ハナキリンはマダガスカル原産でトウダイグサ科ユーフォルビア属の小低木状乾性の多肉植物です。茎に鋭いトゲがびっしりあるのが特徴で、寒さと過湿には弱いですが、直射日光や乾燥に強く比較的育てやすい植物です。一般に生育期（春～秋）は日当たりの良い場所で、水やりは鉢土の表面が乾いて数日おいてから与えてください。冬期間も気温 10℃以上を確保し水やりは極力控え育ててください。また、花びらのように見える赤や黄色ものは苞で、花はその中心の碗状の小さなものなのです。

ご相談のように花が咲かない場合は、花付を良くするために、日当たり良く室温も約 20℃を確保し、5月頃からゆっくり効く肥料で「リン酸」と「カリ」成分の多い肥料を与えてみてください。また、植替えなどで鉢を替える場合は、出来るだけ同じ大きさの方が花付は良いようです。

ハナキリンは挿し木も可能です。伸びすぎた茎は6～8月頃にせん定し、切った茎を5～10 cm程度のさし穂に仕立てます。切口から出る乳白色の液を丁寧に水で洗い流して、雑菌が入らないように切口を2～3日乾かし、フルイで微塵を取り除いた赤玉土か鹿沼土を使い挿し木します。1～2か月で根が出ますので軽く持ち上げて発根が確認できましたら鉢上げしてください。

なお、切口から出る乳白色の液はアルカロイド系の毒性があり、皮膚などに付くとかぶれることがありますのでご注意ください。

（参考資料：小学館「園芸植物大事典」、NHK 出版「新園芸相談⑩サボテン&多肉植物」ほか）

植物の病害虫

その23 「ジャガイモそうか病」

塊茎収量に影響ありませんが、食用、食品加工用としての価値を大きく損ね、また重症いもではでん粉含有量の低下を招きます。近年、ジャガイモ栽培地域で発生していますが、家庭菜園でもよく見られる病害です。



塊茎表面のバレイショそうか病
〔(社)北海道馬鈴しょ生産安定基金協会より〕

1 寄主範囲

本病はスト렙トマイセス属の複数の放線菌（細菌）で、ジャガイモをはじめ、テンサイ、ダイコン、ニンジン、カブ、ゴボウなど多数の根菜類に寄生します。ただし、柑橘類のそうか病は子のう菌（菌類）、ジャガイモ粉状そうか病はネコブカビ類（原生生物）なので、病原菌が異なる別の病害です。

2 病徴

塊茎表面に直径5～10 mm程度の褐色でコルク化したあばた状の病斑が現れます。

多発すると病斑が融合して、ほぼ全面を覆うことがあります。病斑は大きく3つの型に分けられ、あまり凹凸のない普通型病斑、病斑の内側が5 mm程度陥没する陥没型病斑で道南地方に多く見られ、さらに病斑が3～5 mm程度盛り上がる隆起型病斑があり、これは道東地方に多く見受けられます。

その他、まぎらわしい症状として、病斑が小さく紫褐色で周皮が襟状に残る粉状そうか病や、病斑が表面にのみ現れ、亀甲紋で陥没したり隆起したりしない亀の甲症とは区別します。

3 伝染経路

土壤中で腐生的に生存して土壌伝染するほか、罹病塊茎や本菌を含む土壌が付いた塊茎によって種いも伝染します。種いもによって持ち込まれた本菌は土壌中で越冬し、翌年以降に土壌伝染します。

4 発生環境

- (1) 塊茎形成期（着蕾～開花期）に地温が高く（20℃以上）、土壌の乾燥状態が続くと多発する傾向があります。
- (2) 土壌pH5.2以上で発生し、6.5以上になると多発するので、カルシウム（石灰質肥料など）の多施用は発病を助長します。
- (3) 種いも伝染の場合、汚染いもより罹病いもで、さらに黒あざ病によってストロンが侵害されて種いもの近くに新しい塊茎が形成された時に発病は多くなります。

5 防除法

- (1) 無病いもを植え付けし、ジャガイモの連作を避けて4年以上の輪作をします。
- (2) 本病の抵抗性品種は「ノーキングラセット」「北育7号」「ユキラシャ」などがあります。
- (3) 窒素質肥料は硫酸などの酸性肥料を使用し、未熟有機物の施用を避けます。
- (4) 土壌pHを5.3以下に調整し、萌芽期から7月末までは土壌水分を適度に保つようかん水します。
- (5) 種いも消毒やコンテナ、切断ナイフなどの消毒を行います。また、小面積では植え付け前に対象薬剤を全面または作条に土壌混和する方法があります。

「カンノンチク・シュロチクの冬の管理」

ヤシ科 カンノンチク属 中国南部、東南アジア原産

カンノンチクとシュロチクはともにタケの仲間と思われがちですが、そうではなくてヤシ科の植物です。タケの幹（^{みき}稈）は中空で、幹を保護するため、タケの皮をつけていますが、カンノンチクとシュロチクの幹は中いっぱいにつまっており、幹を保護するのはシュロの毛と同じような網状の毛です。

《栽培のポイント》

■気温 10℃以下では生長が止まり、休眠状態を続けるため過湿や肥料が大きな害を与えます。低温の害を受けないため、10℃くらいの温度を保ちましょう。この時期は株分けもできません。

10℃以上の温度があれば株はやや成長し、18℃以上保てれば活発に成長します。

かん水は鉢底から水が流れるくらいたっぷりと与えます。受け皿の水が鉢底をひたさないよう気をつけましょう。根腐れの原因になります。



カンノンチク



シュロチク

（参考資料：NHK「趣味の園芸」）

展示室の植物（59）

パキラ・グラブラ （和名：パキラ、別名：カイエンナッツ）

学名 *Pachira glabra* アオイ科 パキラ属

原産地 熱帯アメリカ等の湿地帯



パキラ・グラブラは、幹の根元が膨らみ、手を広げたような常緑の5枚の葉を付ける形は独特の雰囲気がある観葉植物です。

幼木状態を維持した小から中サイズのものに人気があります。種子から自然成長されたものや、数本の幹を 三つ編み状にしたもの、鉢植えからハイドロカルチャーまで、様々な形で流通しています。

国内に観葉植物として導入されたときに、学名を間違えてパキラ・アクアチカ（*P.aquatica*）として紹介されました。